刈谷の傑出・近世の伝記作家

森　銑三

刈谷市立依佐美中学校
加藤　秀貴

はじめに

我が家の書斎に、父から譲り受けた大正・昭和の初めの頃の本が数冊ある。その中の一冊に刈谷の勤王の志士「松本奎堂」の伝記がある。そして、その作者が森銑三である。奎堂については、何度も読み直し、刈谷藩について調べたこともあるが、作者の森銑三については、刈谷出身であること、我が家とご近所であることも知らなかった。森銑三の弟が森三郎という童話作家である。刈谷市では、森三郎童話賞を設け、全国から新作の童話を募集している。私の友人がその催しに応募し、見事、入賞した。タイトルは「初雁とまつ」で、松本奎堂をモデルにもとどんな童話である。それが奎堂について描いた童話である。それが奎堂について読み直すきっかけになり、森三郎の兄、森銑三とは？、と調べ始めるきっかけになった。

森銑三概略

「学芸史家。愛知県生まれ、史料編纂所勤務。近世の人物の伝記を研究。著『渡辺崋山』など」と広辞苑にも紹介されている。

また、永井荷風に「森さんこそ、真の学者である」と評され、芳賀徹（元東大教授）には、「わずかに残された資料を丹念に掘り起こし、これまでの歴史や暗闇に埋もれていた江戸の文人学者や名もなき人びとの生涯を、今の時代によみがえらせた森さんの仕事の意義は大きい。」と言われた。

森和也（財團法人東方研究會研究員）は、「人物研究に就いての私見」と称して、「森銑三翁は碩学と呼んでまったく過褒とならない人です。

江戸・明治の人物研究を志す者でその名を知らぬ者は偽物と思って間違いなく、一編の著作も読んだことがない者は怠け者の誹りを免れることはないでしょう。」と言う。

晩年は、早稲田大学の講師をしながら、執筆にいそしみ、昭和四十二年に「森銑三著作集」が中央公論から刊行されたことにより、読売文学賞を受けた。

森銑三がなくなった時の朝日新聞の記事に、「この碩（せき）学を、教授に迎えなかった官学の偏狭。植物学者の牧野博士、歴史の森銑三氏」と紹介されている。

こんな森銑三の生い立ちについて年譜を追って見ていこうと思う。

刈谷町・肴町の生家

森銑三は、明治二十八年、刈谷町肴町（現在の広小路６丁目）に生まれる。家庭の事情で尋常小学校４年しか行っていない。小学校卒業後、叔父を頼って上京。工手学校に入るもすぐに体調を崩し帰郷して静養。　この時、親戚の蔵書家から明治の文学書を借りて読む。鴎外、漱石、子規、紅葉、露伴、緑雨、一葉を通じて文学の骨格を体得。この頃から自分は工手学校には不向きであることを自覚する。そして、文学に目覚めていく。

幼い頃の思い出から

「私がまだ小学校へ上る前、両親に連れられて御園座に初代の左団次の芝居を見た。その時の思出が、ほのかに残ってゐる。・・・私はまだ小さかったし、今から七十年も前のことなのだから、その芝居の記憶など、全く薄らいでしまってゐるのであるが、一番目は本朝廿四孝で、座頭の左団次の扮する山本勘助が、花道の七三に、長身の鎗を杖にして立った。その姿の立派だったこと―。それが今に忘れられない。私は左団次に活きた古英雄を、目のあたり見たと、いってよいであらう。左団次の勘助は、事実威風凛々とし

少年時代　（弟、妹と）

て場内を圧したのであらうが、何者かに焼きつけられたといはうか。何ともいはれぬ気持になったことを、今に覚えている。そしてその一事から推すとよし頑是ない幼子にでも、ほんたうによいものを見せておくといふは、意義があるのではあるまいか。左団次の山本勘助の立派な姿を見たといふだけでも、私のその日の観劇は、ありがたいことだったと思ふのである。（はかない思い出より）」

幼少時から、文学への思いがふつふつと感じられる。

十九才で又上京。雑誌「学生」の愛読者で、しばしば投稿していたことから、編集長の西村真次（早稲田大学・歴史学者）に相談する。叔父と西村が偶然にも戦友であったことから、西村に目を掛けられ、文章の手ほどきを受けるようになる。しかし、また体を壊して帰郷。

村上文庫で

大正四年（二十歳）の時に刈谷市の図書館に雇われ、古版本、古写本などの分類目録を作る仕事に携わり、これからの人生の基盤を作ることになる。二万五千点にも及ぶ膨大な資料を一人で整理したのである。写本がいっぱいの困難極まる資料も数多かったが、分類整理され、大正六年『刈谷町立刈谷図書館分類目録』として謄写刊行された。この仕事に携わることにより、古書（漢文の書）の読解力、人物伝記に関しての知識を身につけた。

※村上文庫は、村上家（刈谷藩の医師）が、襲蔵した書籍に、幕末の国学者村上忠順（一八一二～一八八四）の収集・書写した本及び彼の著書が加わって形成された約二万五千冊のコレクションである。これを大正三年に刈谷市内の藤井清七・宍戸俊治の両氏が買い上げ、刈谷市に寄贈したものである。その内容は、文学・語学の他、神祇、宗教、哲学、教育、地理、法制、理工学、医学などの多岐に亘る。また忠順の自筆写本は膨大な数に及び、著書も七七種三八〇冊に達している。

流転の時代

その後、一番純粋に過ごすことができたと振り返る、隣接の亀城小学校の代用教員として教壇に立つ。しかし、これも八ヶ月でやめ、東京小石川の大道社に入り、雑誌の編集に携わる。大正九年には、高崎の小学校で再び代用教員になる。そこで、同僚の栗原長治と「小さな星」という童話雑誌を発刊。デモクラシーの風潮の中で文学に目覚めた。弟の三郎は、この影響を受け、童話作家として大成していく。しかし、銑三は、高崎の教育界には受け入れられず、大正十二年には、ふるさとへ帰り、名古屋図書館の雇員として勤務することになる。「小さな星」の創刊号に「わたしらの愛する小さい人達。びろうどのそらにまたたきする星のように清くあれ、美しくあれ。わたしらは、みなさんの純なたましいが、どこまでもすなおに、まっすぐに伸びて行くように、こんな雑誌を起こしました。」（高崎百年から）と記し、その純粋な思いを表している。

近世の伝記作家として

名古屋図書館時代には、地元紙「新愛知」に『偉人歴』という記事を一年十ヶ月にわたって連載する。その日、その日を命日とする偉人の随想で、六百人余りを連載したものである。明治天皇、西郷隆盛など名を馳せた者もいるが、無名の偉人を数多く紹介している。この頃から近世の伝記作家としての方向が固まり始める。

明治天皇の逸話

明治十一年、北陸御巡幸の際に、新潟県のある学校で、化学の実験をして天覧に供することになった時、最後に祝砲の意を籠めて、酸素水素の爆発を行う予定だった。ところがどういう加減だったのか、

当日はそれが予期せぬ大音響を発して、随行の大臣以下、飛上るほどの驚き方をした。それだのに天皇御一人は、顔色一つ御変えにならぬ。終始泰然自若としてましました。後で、担当教師は譴責を覚悟して意気銷沈していたところへ、天皇から御沙汰があって、化学の実験は格別に面白かった、とのことだった。教師はありがたさに感泣した。

このように、いろいろ読んでいて楽しく、清々しい話を連載していった。

三十一歳になり、名古屋図書館長の推薦で上野の帝国図書館内にある文部省図書館講習所に入学する。入学資格は中学校卒業でなければならなかったが、館長の強い推薦で特別に入学を許可される。

一年後の大正十五年に卒業。東京帝国大学史料編纂所の図書係に採用される。

この当時のことを、銑三は、

「学問が染み込んでいて何でもない雑談の間にも、その身に付いているものの閃くような人の存外少ないことを知って、そうした点に物足りなさを感ぜずにはいられなかった。」と語るが、古文書に関する学殖にさらに磨きがかかった。また、職場を離れての活動も活発であった。

ラジオ放送で、人物伝を評したり、「子供の科学」、「赤い鳥」に執筆したり、井上通泰、柳田国男、三田村鳶魚と交流を持ち、三田村の西鶴輪講の会に出席したり、洗雲亭文庫の整理をしたりと、近世の伝記作家としての基盤をさらに磨いていった。

この頃の活躍を示す「オランダ正月」について森田誠吾氏が書かれた評があるので紹介しよう。

この本は、森先生が雑誌『子供の科学』に連載された、江戸時代の科学者たちの伝記を一冊にまとめられたもので、初版が出版されたのは、昭和十三年のことです。

子供向けの伝記ですから、語り口もやさしく、古い本ですが非常に読みやすいのが特徴です。いまでも絶版になることなく、読み継がれているは驚くべきことだと思います。

この本を一読した方は、かならずや先人たちが学問に寄せた情熱に感動し、それら先人たちへの尊敬の念がわいてくるはずです。それとともに、江戸時代の学問が漢学ばかりではなく、いろいろな方面に広がっていたことにも驚きを禁じえないと思います。私は中学生のときにはじめて読みましたが、以後ときどき読み返すごとに、あらたな感動を覚えます。

在職十三年で編纂所を退職。しばらく経ってから、名古屋図書館長・阪谷のすすめで蓬左文庫（目白徳川邸）主任となる。

執筆の時

蓬左文庫に勤めてからの銑三は、「大雅」「近世畸人伝」「伝記文学・初雁」「書物と江戸文学」「宮本武蔵言行録」「近世人物叢談」などを次々と出版。「渡辺華山」では、従来の「華山」研究を数歩進めたことで評価されたりした。「佐藤信淵」ではそれまでの評価と違った正反対の断を下したことで、物議をかもしたりもした。

銑三は、人物の研究は、「一に資料、二に資料、三に資料」と言い、根本資料を見ることの大切さを説いている。その資料のなかでも、日記・手記、書簡を重要なものとして挙げ、漢文訓読の知識の必要性も説く。明治の

半ばまでは漢文は「第二の国文」であったわけで、これが読めなければ、資料の大半は理解できなかった。

さらに、「その人の精神に触れること」であると言っている。そして、その精神に触れるためには、研究する側も「理解し得られるだけの水準に達して」いることが必要であり、そのため、人物研究には、その研究者の人としての本質が表れるとしている。

「人物研究家は、公平であるのと同時に、真正直でありたい」と。これは、研究者である以前に、人として立派でなければということを説く。

この頃になると、雑誌などに寄稿することが多くなり、忙しくなったので、五十才を期に蓬左文庫を円満退任。執筆活動が本格化する。

勤めを辞め自由の境涯に入ってからは、上野図書館を自分の書斎のようにして、暮らした。この時代が最も適意の時代であったと回想する。

膨大な資料の焼失

昭和二十年、四月、自宅が空襲に見舞われ、膨大な研究資料を焼失。当時五十歳の銑三にとって、系統的近世文芸史の研究に頓挫をきたすことになった。

さらに、戦争が激しくなるにつれ、生活もままならないようになってきた。戦後も「戦争は終わったけれど・・・今一度根本からやり直す気力は沸いてこなかった。」と当時のことを振り返っている。

執筆再開

昭和二十二年、反町茂雄（古文書界の大御所）と偶然再会し、古書肆弘文荘に勤務することとなり、反町が所有する藤沢の鵠沼海岸に転居。仕事の傍ら、精力的に執筆するようになる。

反町茂雄は言う。「なごやかに、四十年近くも助け合い、あの方の終の住み家となった湘南の病院に、長期入院される時まで、続きました。お暮らしの保証は亡くなられるまで無事円満に継続しました。お互いに幸の成り行きでした。」

いい友に恵まれ、執筆もさらに進んだ。江戸中心から明治、大正期の人物、随想などまで広げ、精力的に執筆する傍ら、昭和二十五年から十五年間、早稲田大学で書誌学の講師を勤め、後進の育成にあたった。

早稲田大学を七十一歳で退職後も弘文荘に勤め、昭和四十五年から中央公論により「森銑三著作集」刊行も始まり、今までの集大成を行った。

全十二巻、別巻一が昭和四十七年に完結。これにより読売文学賞を受けることになる。

衰えぬ魂

その後も、「井原西鶴」についての考察をさらにすすめた。西鶴の作品は、多く門人・弟子の作に手を加えたものがほとんどで、西鶴自身がものしたのは「好色一代男」のみという、近世文学研究者の世界では驚天動地になるはずの西鶴論でした。しかし斯界の学者・研究者からはほとんど反応がなく、無視された状況であった。

「小学校しか出ていない」銑三は、西鶴のことも含めて不遇の研究者と言われる。しかし、優れた著作を後世に遺し、友人に恵まれ、先達の知遇を得、森銑三は 昭和六十年九十歳で他界した。

参考文献

森銑三著作集等作品

郷土研究史「かりや」

かりやゆかりの人物

明治人物語　森誠吾著

森銑三ビデオ